

演題番号 高校生が体験した東日本大震災による地域社会や生活の変容と健康への影響

○ ^{さきはらかずこ} 笹原和子（東京学芸大学大学院 教育研究科） 朝倉隆司（東京学芸大学）

【背景と目的】 2011年3月11日に発生した東日本大震災による地震と津波、4月11日、12日の地震及び東京電力第一原子力発電所の事故による放射能汚染の影響などにより、高校生が体験した被害は、自宅の全壊や半壊、居住地からの強制及び自主的避難、環境放射能の影響や風評被害、家族内の関係の変化や友人との離別など多岐にわたっている。そこで、本研究は高校生が体験した身近な地域社会・生活環境の変容と心身の健康への影響を明らかにし、災害後の健康支援について考察する。

【対象と方法】 福島県いわき市内のS高等学校の生徒を対象に、自記式質問紙により心身の健康状態に関して2011年4月と7月の2回にわたり調査を実施した。また12月には1、2年生629名（1年51% 2年49%）を対象に、東日本大震災による地域社会・生活の変化の体験を自由記述により調査した。

まず3月11日の震災以後、高校生が体験した生活変容の質的分析を行う。次いで、4月と7月の健康指標における変化を対応のあるt検定で検討し、ここでは自宅の被災との関係についても検討する。ちなみに、2回の自記式調査に参加した生徒926名（945名中）の主な被災源のパターンの内訳は、地震50.3%、地震と誘発地震16.0%、地震と津波13.3%、地震と津波と誘発地震10.8%、地震と津波と原発事故9.6%である。

なお、本研究は、大学の倫理審査を受け承認されており、調査に際し個人情報保護に十分配慮を行った。

【結果と考察】 自由記述による体験調査によると、地元地域への影響では「帰りたいのに帰れない状況がもどかしく悔しい」「人が少なくなった」「見渡す限り仮設」などの変化が報告され、自宅は「津波で全壊」「避難している間に空き巣被害にあった」「屋内の放射能濃度が高い」、家族については「家族間で喧嘩が増えた」「父や母が仕事を失った」「精神的に家族全員がつかかった」など、地域、家財、家族への被災の大きさを物語る体

験が報告されていた。生徒自身については「プライバシーが保てない」「自分の未来から光が消えた」「眠れない」、放射能に関しては「どの程度の危険があるのか、正しい情報を提示して欲しい」「将来の身体への影響、自分の子供への健康被害」などの不安が記されていた。友人やクラスメイトについては「原発の影響で、親戚・友人・クラスメイト皆バラバラになった」などが訴えられていた。

以上の結果より、東日本大震災が生徒の身近な地域環境、家族、本人、学校・友人関係など多岐にわたって影響を及ぼし、高校生の被災体験を形成していた。しかし、生徒たちは、被害に関することばかりではなく、将来の地元の復興への関わり方や、生き方について幅広く言及しており、冷静に事態を受け止めようと努力しているように思われる。将来の生き方を、プラスにもマイナスにも変えうる大きな体験であったことが分かる。

心身の健康に関する20項目（5件法）に対しては、因子分析を行った結果、不安（8項目）、睡眠の阻害（3項目）、体調不良（3項目）、人間関係の疎外（5項目）の4因子が抽出され、それぞれ尺度化を行った。

4尺度得点の変化を対応のあるt検定で検討した結果、生徒全体は4月に比べ7月の得点が全て有意に低下しており、問題が軽減していた。さらに4尺度得点に対する自宅の被害の有無と時期の効果を合わせて検討するため、繰り返しのある分散分析を行った。その結果、人間関係の疎外を除く全ての尺度で、自宅の被害の有無による有意な差と時間経過による症状の有意な軽減が認められた。また、いずれの尺度も自宅の被害と時間経過における有意な交互作用はみられなかった。

【結論】 いわき市内の仮の住まいで生活をしている生徒が多数存在するが、それを受け入れているいわき市もまた被災地区であるため、地域や家族・学校での生活変容や社会関係は複雑さを増している。今後さらに健康への複雑な影響が表れてくることが憂慮され、さらに調査を継続し、生徒の変化に適切に対応していく必要がある。

E-mail ; m092302n@st.u-gakugei.ac.jp (笹原)